

### 3. 宗像市の主な植生

#### (1) 自然草原

##### (1-1) 海岸砂丘草原 [植生自然度 10]

**[相観・立地]** 海岸砂丘の低茎草本や小低木からなる草原。塩分を含んだ強風や強い日射による生理的・物理的乾燥のほか、砂の移動による植物体の埋没や根の露出等の物理的破壊にもさらされている。

**[種組成]** 汀線から内陸に向かって、以下のような群落が帶状に分布している。

- ① 前部砂丘植物群落：コウボウムギが優占し、ハマヒルガオ、ハマニガナ、ハマエンドウ、ハマグルマ、スナビキソウ、ハマボウフウ、ツルナ、オカヒジキ、コウボウシバ、オニシバ、ケカモノハシ、ビロードテンツキ、ハマタマボウキ等を交える。これらには深い根、長い地下茎、多肉葉やクチクラ葉等を持つものが多い。これら吸水・貯水・蒸散防止機能により乾燥・飛砂・堆砂に耐えている。群落高は 0.3～0.5m。
  - ② 後部砂丘植物群落：小低木のハマゴウが優占し、前部砂丘群落の構成種やチガヤ、カワラヨモギ、帰化植物のコマツヨイグサ、オオマツヨイグサ等からなる小低木群落。
- ハマゴウは後方に行くにつれて匍匐型から直立型になる。ハマオモト（ハマユウ）を交えることがある。群落高は 0.5～1m。

**[分布域]** 市内では、さつき松原にやや大きな群落、草崎半島の付け根や深浦浜に小群落がある。近隣では、遠賀郡の三里松原、福津市の勝浦浜・白石浜、福岡市の海ノ中道等に大きな群落がある。

**[群落の現状]** さつき松原はオフロード車の進入は禁止されているが、オフロードバイク、海水浴客等による踏みつけ、波浪による砂浜の浸食が見られる。

##### (1-2) 海岸風衝草原 [植生自然度 10]

**[相観・立地]** 海岸崖の草本群落。岩の割れ目や上方から供給される土砂の堆積した斜面に生じる。海岸砂丘草原と同様、強風や波浪による風害・塩害にさらされる。

**[種組成]** 土壤の形成状態に応じた次の群落がある。

- ① 岩隙地植物群落：土壤が形成されていない岩の割れ目に、タイトゴメ、ハマツメクサ、ソナレムグラ、ハマゼリ、ハマエノコロ、イソヤマテンツキ等が線状生育する。群落高は 0.1m 以下。
- ② 急斜地植物群落：土壤が多礫質から有機質の急斜面に生じる草本群落。ダルマギク、ホソバワダン、ハマナデシコ、ハマボッス、ボタンボウフウ、ハマウド、ニオウヤブマオ、ハマナタマメ、ツクシキケマン、ツワブキ、クサスギカズラの広葉草本、ハチジョウススキ等の禾本科からなる。群落高は 0.3～2m。

沖ノ島にはヒゲスゲが密生する禾本科草原がある。群落高は 0.5～1m。

**[分布域]** 市内では沖ノ島、大島、地島、勝島、鐘崎、草崎半島に、近隣では響灘・玄

界灘沿いの島嶼部や海岸山地斜面下部に見られる。

**[群落の現状]** 海岸山地斜面は梅雨・台風時に土砂崩壊を起こすことがあるが、居住や農耕に適さないので、比較的自然状態が保たれている。

#### (1-3) 塩沼地草原 [植生自然度 10]

**[相観・立地]** 入江、河口、干潟、ラグーン、塩田跡等の塩湿地に生じる草本群落。

**[種組成]** 市内には、ヨシやヒトモトスキの純群落がある。群落高は約 1.5m。

**[分布域]** 釣川河口東岸のラグーンに小面積の群落が見られるのみ。近隣では福津市の内海にヨシの純群落、ハママツナ、ナガミノオニシバ、シオクグ、ハマアカザが混生する群落、塩田跡にヨシやヒトモトスキの純群落、小規模なシバナ群落等、和白浜のラグーンや干潟にヨシ、ヒトモトスキ、ハママツナの純群落等がある。

**[群落の現状]** 釣川河口の群落は、約 30 年以上変化なし。他地域では、埋め立てや護岸工事等により、消滅または分布面積が減少した例がある。

#### (1-4) 河川水生植物群落 [植生自然度 10]

**[相観・立地・種組成]** 流水中や河辺に生じる遷移初期の草本群落。浚渫や洪水により、群落が破壊されることがある。水位の違いによる次の群落がある。

- ① 沈水植物群落：砂泥質の河床に生じる小群落。1年草のオオカナダモやヒルムシロが純群落を形成する。
- ② 抽水植物群落：流水中や砂州に生じる多年草群落。ヨシ、ツルヨシ、マコモ、ガマ、ヒメガマ等が単独または複数種で群落を形成する。群落高は 1 ~ 2 m。このほか、オオフサモの純群落もある。群落高は水面上 0.3m 前後。
- ③ 河辺植物群落：砂州上の草本群落で、洪水時以外は冠水しない。ミヅソバ、セリ、クレソン、アメリカセンダングサ、キシユウスズメノヒエ、クサヨシ、ジュズダマ等からなる。植物体の地上部は冬季に枯死する。群落高は 0.5 ~ 1 m。

**[分布域]** 宗像市内では釣川の本流と各支流、農業水路などに分布。

**[群落の現状]** 耕地整理等に伴う水路の3面護岸化により、分布域が狭められている。釣川には多数の井堰があり、灌漑期にその上流側に停水域が生じる。そこには、後述する溜池水生植物群落のヒシ群落が生じることがある。

#### (1-5) 溜池水生植物群落 [植生自然度 10]

**[相観・立地・種組成]** 溜池やダム等の止水域に生じる水生草本群落。次の群落がある。

- ① 浮葉沈水植物群落：根や茎が水中、葉が水面にある群落で、ヒシ、スイレン、ハスの純群落がある。スイレンやハスは、密集すると葉が水上に抽出することがある。浮遊植物のウキクサ、アオウキクサが漂着していることもある。かつてヒツジグサ群落が宗像市東南部の溜池にあったが、現在では失われている。
- ② 抽水植物群落：サンカクイやキシユウスズメノヒエが優占する群落。群落高は水面

上 0.3～0.5m 前後。

③ 浮遊植物群落：根は水中、茎葉が水面上にある浮遊植物による群落。ホテイアオイが密集し、群落高は水面上約 0.7m。

[分布域] ①、②は市内各所の溜池や多礼ダム、③は江口の新川最上流の無名溜池。

[群落の現状] 溜池数の変化がほとんどないので、群落発生箇所数にもほとんど変化がない。大型住宅団地造成に伴う沈砂池数は増え、そこに抽水植物群落が発生している。

大井ダムや多礼ダムにおける近年のヒシ群落の発生は、水域の富栄養化の表れと考えられる。

## (2) 原生林及び自然林

### (2-1) トベラーマサキ群集 [植生自然度 9]

[相観・立地] 海岸山地斜面下部の照葉樹低木林。強風により伸長成長が抑制され、幹や枝葉が主風の風下側に傾く風衝形を呈する。浅土・適潤～乾燥斜面に生じ、海岸風衝草原の上方に位置する。群落高は主風の強さに応じて変化し、1～数m。階層数は2～3。

[標徴種・種組成] 群落の上層にトベラ、マサキ、ハマヒサカキ等が密集し、マルバグミ、アキグミ等を交える。下層にツワブキ、ヤブラン、キヅタ等が散生する。

[分布域] 市内の島嶼部や海岸山地の斜面下部。九州から北陸関東に分布。

[群落の現状] 海岸風衝草原と同様、海岸山地斜面は梅雨・台風時に土砂崩壊が起こり、群落が破壊されることがある（沖ノ島、草崎半島）が、居住や農耕に適さないので自然状態が保たれている。

### (2-2) オニヤブソテツーハマビワ群集 [植生自然度 9]

[相観・立地] 上記群集と同様、風衝形を呈する照葉樹低木～亜高木林。土壌状態はそれよりもよく、深土・適潤～乾燥斜面に生じる。階層数は2～3。

[種組成] トベラーマサキ群集構成種に、亜高木のハマビワ、ヤブニッケイ等、草本のオニヤブソテツ、ノシラン、ムサシアブミ、ツル植物のフウトウカズラ、ティカカズラ等が付加することで、トベラーマサキ群集から区別される。

[分布域] 市内の島嶼部や海岸山地斜面下部に生じる。九州から山陰・東海地方に分布。

[群落の現状] 海岸風衝草原やトベラーマサキ群集と同じ。

### (2-3) ムサシアブミータブ群集 [植生自然度 9]

[相観・立地] 海岸山地山麓部の深土適潤地に生じる照葉樹高木林。風当たりは中庸で、上記 2 群集のような風衝形を呈することは少ない。群落高は約 10～20m。

以下の群落番号 II・4～6 の照葉樹高木林と同様、階層数は4、林冠はドーム状、凸レンズ状の樹冠が連なって盛り上がっている。

[標徴種・種組成] 上層にタブノキ、ヤブニッケイ、シロダモ、シイ、アラカシ等、中

層にヤブツバキ、トベラ、マサキ、ハマビワ、アオキ等、下層にオニヤブソテツ、ムサシアブミ、ノシラン、ヤプラン、ツワブキ、フウトウカズラ、キヅタ、ティカカズラ等が生じる。沖ノ島の同群集にはシイ、カシ類がなく、ナタオレノキ、ヒゼンマユミが加わる。本県では長崎・佐賀県の同群集標徴種モクタチバナ、アオノクマタケランは見られない。

上層にタブノキが優占し、シイ・カシ類が少ないと、下線種を含むことで他の照葉樹高木群落から区別される。

**[分布域]** 沖ノ島の中腹以上に大群落、大島の中津宮境内や御嶽山頂、地島の厳島神社境内や遠見山、鐘崎の織幡神社境内、草崎半島に小群落がある。宗像地方では神社林として残っていることが多い。九州、四国南部の沿岸部に分布。

**[群落の現状]** 当群落は、宗像地方でも人間活動が活発化する以前は、海に近い平野部にも分布していたと見られるが、市内では田島の宗像大社境内に断片的な群落が残存する程度である。

なお、当群落を含め、以下の照葉樹自然林や二次林、夏緑樹二次林にも共通することであるが、1950年代後半の拡大造林時代に、利用価値が薄れた雑木林は伐採され、その跡地に建築材として優れた性質を持つスギ・ヒノキが植栽された（皆伐一斎造林）。

#### （2-4）ミミズバイースダジイ群集 [植生自然度9]

**[相観・立地]** 海岸からやや離れた低海拔域山地の深土適潤地に生じる照葉樹高木林。群落高は約15~25m。

**[標徴種・種組成]** シイ・カシ類が優占すること、ミミズバイ、コバンモチ、ヤマビワ、イチイガシ、タイミンタチバナを有することで他の照葉樹高木群落から区別される。

本県の同群集では、長崎・佐賀・大分県以南に出現する群集標徴種のナガバジュズネノキ、ルリミノキ、ミサオノキが欠落している。

**[分布域]** 城山の中腹部、吉留の八所宮境内、名残の田代、鎮国寺境内に典型的な群落が残存する。本県では標高約300m以下の山地に分布する。九州、中四国、紀伊半島に分布。

**[群落の現状]** 本群集の主要発達域は、住宅団地・果樹園・ゴルフ場等造成の対象になりやすい山麓部であり、かつては各地に分布していたと見られるが、開発ラッシュが一段落した今日では、おおむね保存状態はよい。

#### （2-5）ヤブコウジースダジイ群集 [植生自然度9]

**[相観・立地]** 標高約300~600mの深土適潤~乾燥地に生じる照葉樹高木林。群落高は約15~25m。

**[標徴種・種組成]** シイ・カシ類が高木層で優占するが、特定の群集標徴種をもたない。前述のミミズバイースダジイ群集や後述するイスノキーウラジロガシ群集から、それぞれの群集標徴種を差し引いたような種組成の群落である。

**[分布域]** 城山の中腹以上の尾根地形上に見られる。九州から東北南部にまで分布する。

〔群落の現状〕 城山の同群落の保存状態はよい。

#### （2-6）イスノキーウラジロガシ群集 [植生自然度9]

〔相観・立地〕 相観、立地、群落高はヤブコウジースダジイ群集に準じる。

〔標徴種・種組成〕 上層にイスノキ、ウラジロガシ、アカガシ、シイノキ、中層にバリバリノキ、ヤブツバキ、ヒサカキ、下層にツルシキミ、キジノシダ、ベニシダ、ヤブコウジ等が生じる。下線種で他の照葉樹高木群落から区別される。

〔分布域〕 城山や孔大寺山の山頂付近に見られる。城山ではイスノキ、ウラジロガシ、シイノキのいずれかが優占するが、孔大寺山ではアカガシが優占する。近隣では北九州市の戸上山、筑前町の大根地山、背振山の山頂近くに典型例が見られる。九州、四国に分布。

〔群落の現状〕 城山の同群落の保存状態は良好。

#### （2-7）ムクロジ林 [植生自然度9]

〔相観・立地〕 上記照葉樹高木林とは異なり、当ムクロジ林及び下記エノキ・ムクノキ林は夏緑樹高木林。階層数は4。表土が薄く、部分的に岩盤が露出する谷地形上に生じ、多雨期に一時的な流水が見られる。

〔種組成〕 高木層にムクロジが優占し、夏緑樹のムクノキ、常緑針葉樹のカヤが生じる。中層にアオキが密生し、下層に各種シダ類が頻出する。優占種のムクロジは樹高約20m、胸高直径約50cm。

〔分布域〕 城山南面の3箇所に見られる。県内では旧山田市大法山のようにムクロジが単生する樹林はあるが、ムクロジ優占林はない。

〔群落の現状〕 夏緑樹林帶（ブナ帶）の谷沿いには、渓谷林と呼ばれるシオジーサワグルミ群集やハルニレ群集が普通に見られるが、照葉樹林帶ではケヤキ林以外に渓谷林に相当する群落はほとんどない。ムクロジ林は分布地が限られているため、局地的群落の地位にとどまっている。城山のムクロジ林の保存状態は良好。

#### （2-8）エノキ・ムクノキ林 [植生自然度9]

〔相観・立地・種組成〕 相観、立地、群落高、階層数はムクロジ林に準じるが、ムクロジが出現しないこと、エノキやムクノキが優占することで特徴づけられる。

〔分布域〕 城山、孔大寺山、湯川山の中腹部谷沿いに分布する。

〔群落の現状〕 当地方のムクノキは木材腐朽菌（サルノコシカケ等）に罹患しやすく、高木としては寿命が短いが、林床に実生があるので群落の存続は可能と考えられる。

### （3）二次林

#### （3-1）シーカシ萌芽林 [植生自然度8]

〔相観・立地〕 照葉樹自然林に比べ、林冠はやや平坦な照葉樹高木林。照葉樹高木の幹は萌芽形を呈する。これは、薪炭が家庭用燃料の主流であった頃に定期的に伐採され、

切り株から萌芽（ひこばえ）が発生し、それが成長して一株多幹樹形を呈するようになったからである。一方、薪炭林として利用されていた頃、伐採後に発生したカラスザンショウ、ネムノキ、アカメガシワ、ヤマザクラ、ハゼノキ等の夏緑樹が成長し、一株一幹の高木となっている。また、林内には伐り残された有用樹クスノキの大径木が見られることが多い。

**[種組成]** 高木層構成種はシイ（スダジイ、コジイ）、アラカシ、ヤブニッケイ、シロダモ、モチノキ、クロキ等、中・下層に照葉樹自然林との共通種が多く、群集標徴種は未発生である。林内には松枯れ病による立ち枯れや倒伏したアカマツが見られる。

**[分布域]** 県下の照葉樹林域に大小の群落がある。

**[群落の現状]** 丘陵地の当群落は開発やスギ、ヒノキの植栽によって分布面積が減少したが、開発ブームが一応停滞している現在、現状が維持されている。また、薪炭林として利用されなくなった今日では、標高に対応する自然林に回帰している例やタケ類が侵入した例が各所に見られる。

### （3-2）マテバシイ萌芽林 [植生自然度7]

**[相観・立地]** 萌芽形のマテバシイが優占する照葉樹高木林。林冠はシイーカシ萌芽林よりもさらに平坦で、葉が大きく色も濃いので、遠くからでもそれと判別することができる。また、萌芽幹数も多い。群落体系上、ハクサンボクーマテバシイ群落とも呼ばれる。

立地はミミズバイースダジイ群集に準じる。密集した林冠により林内は暗く、林床にマテバシイの落葉が厚く堆積している。4階層あるが、高木層以外はあまり発達していない。

**[種組成]** 他の照葉樹自然林や二次林に比べ、出現種数が少ない。これは、林内が暗く落葉層が厚いことに関係していると考えられる。

**[分布域]** 湯川山や孔大寺山に広く分布。糸島地方、佐賀・長崎県に大規模な群落がある。

**[群落の現状]** マテバシイは現在、街路樹や公園樹として利用されているが、その材は木炭材や独楽用材として利用され、渋みのない大型のドングリは救荒食とされた。利用が途絶えた今日では、天狗巣病に罹患した株が多い。

### （3-3）コナラ林 [植生自然度7]

**[相観・立地]** 照葉樹林域各所に見られる夏緑樹の高木林または亜高木林。シイーカシ萌芽林同様、薪炭林として利用されたが、それよりも伐採周期が短かったようで表土は薄く乾燥している。

**[種組成]** 上層に優占種のコナラのほか、夏緑樹のクリ、ノグルミ、ネジキ、イヌシデ、ハゼノキ等、照葉樹のカクレミノ等が見られる。中層にはヒサカキが多く、ヤマツツジ、シャシャンボ等を交える。下層では照葉樹類の幼木が散生する。シイーカシ萌芽林と同じく、立ち枯れまたは倒伏したアカマツが多い。これは松枯れ病蔓延以前はアカマツも

群落の主要構成種であった証拠と考えられる。

[分布域] 多礼ダム付近や宗像・鞍手境界山地に大小の規模の群落が見られる。

[群落の現状] シイーカシ萌芽林に準じる。

#### (3-4) アオモジ林 [植生自然度7]

[相観・立地] アオモジが密生する夏緑樹亜高木林。春先に多数の黄色花を着け、直後に鮮やかな黄緑の若葉を展開し、他の落葉樹類が落葉した冬季にも黄色葉を着けているので、夏季以外は遠くからでもその存在が認められる。

[種組成] 亜高木層にアオモジが優占し、カラスザンショウ、ヌルデ、ハゼノキ、タラノキ、アカメガシワ等の陽樹類を伴う。下層にナガバノモミジイチゴ、ススキ等が散生する。

[分布域] 池田の伐採跡地に小規模な群落が見られる。旧宮田町には規模の大きな群落がある。雲仙普賢岳噴火の際、火砕流が到達した山麓には広範囲にこの群落が発生している。

[群落の現状] アオモジは西九州、特に佐賀・長崎・熊本の伐採跡地や山火事跡地に普通に群落をつくる陽樹で、約30年前頃から筑後地方で確認されて以来、宗像地方にも見られるようになった。現在、分布域を拡大している模様である。

アオモジの寿命は20~30年くらいの陽樹で、植生遷移に伴ってアオモジ林は照葉樹林に置き換えられると考えられるが、多数の鳥散布種子を着けるので単木としての存続は可能と考えられる。

### (4) 植林

#### (4-1) 海岸クロマツ林 [植生自然度6]

[相観・立地・種組成] 植栽されたクロマツが優占する海岸砂丘上の常緑針葉樹林。植栽後の経過時間とともに、群落高、階層数、種組成、主木の胸高直径が増大する。

- ① 低木林 植栽後間もない群落。階層数は1~2、砂丘植物が遺存する。株本が砂に埋もれたり、折損・枯損したクロマツ苗木が目立つこともある。落葉落枝の堆積量は少ない。
- ② 亜高木林 クロマツの樹高は5~10m、胸高直径は10cm前後、階層数は3~4。立木密度が高い林分では枝葉が密集して林内が暗く、下層植物は少ない。立木密度の低い林分では照葉樹類やツル植物が多くなる。地表に落葉落枝が堆積している。
- ③ 高木林 樹高は10~20m、胸高直径は50cm前後、階層数は4。亜高木層にタブノキ、ヤブニッケイ、シロダモ、ヒメユズリハ、モチノキ等、ムサシアブミータブ群集構成種が頻出する。シイ・カシ類が出現することはほとんどない。近年の松枯れ被害により、高木層からクロマツが脱落し、ヤブニッケイ、ヒメユズリハ等が密生する照葉樹亜高木林・高木林となっている事例が多い。地表に落葉落枝が厚く堆積している。

**[分布域]** 市内では深浦浜、さつき松原、近隣では福津市から福岡市東区の玄界灘沿岸砂丘に分布。九州から東北にかけての代表的な海岸保安林である。

**[群落の現状]** 海岸クロマツ林は、古くから白砂青松とたえられ、優れた海岸景観を形成してきた。その組織的植林事業は、福岡藩が成立した1500年代末期、砂丘後背の耕地や集落を風害、塩害、飛砂害から守るために始まった。江戸時代中期に一時荒廃したようであるが、厳しい管理と補植により今日に至っている。

しかし、このクロマツ林にも受難の歴史がある。例えば、林内のクロマツ大径には、戦時に航空機燃料のオクタン価を高めるためのマツヤニ（松根油）を採取した傷跡を残すものもみられるほか、都市化に伴って福間・古賀・新宮海岸のように分布域が縮小したもの、箱崎松原、千代松原、百地（紅葉）松原のように消滅したものもある。

また、戦後数次にわたる松枯れ病の蔓延による壊滅的な被害と、上記③のような照葉樹林化もあげられる。その原因として(1)1950年代後半に家庭用燃料がプロパンガス等に転換され、家庭用燃料採取のための落ち葉搔きが途絶えたことにより、照葉樹の若木が成長して林冠部に達するようになったこと、(2)これにより林内が暗くなり、陽樹であるクロマツは種子が発芽しても若木の生育が阻害されたこと、(3)落葉落枝の堆積による土壤の富栄養化が進み、貧栄養立地で優勢なクロマツが富栄養立地で優勢な照葉樹類に取って代わられたことが考えられる。近年では官民上げて松枯れ被害木の伐倒・焼却や補植が行われている。

なお、海岸林は照葉樹林であっても、クロマツ林と同じ保安林効果があるので、その活かし方を検討するのも一考である。

#### （4－2）スギ－ヒノキ植林 [植生自然度6]

**[相観・立地・種組成]** 植栽されたスギやヒノキによる常緑針葉樹林。一般にスギは湿性地に、ヒノキは乾性地に植栽される。植栽後の経過時間とともに群落高、階層数、主木の胸高直径が増大する。種組成は、照葉樹林帯から夏緑樹林帯にいたる山地に造林されたので、当該地域の潜在自然植生を反映している。

**[分布域]** 市内各山地に広く分布。武丸台地周辺の新立山では、全山がこの群落で占められている。九州から東北の照葉樹林帯・夏緑樹林帯に分布。

**[群落の現状]** 組織的なスギ・ヒノキ植林は、応仁の乱ごろから京阪の有力商人によつて始められたとされる。県下では戦後復興事業の一環（拡大造林政策）として、1950年代後半から大々的に植栽された。

しかし、高度成長期に過疎過密現象が進む中で、林業従事者が減少し育林作業が手薄となったことや安価な外材の普及の結果、不成績造林地が増えている。近年話題にされるスギ・ヒノキ植林地の荒廃、スギ花粉症、竹林の拡大は、いずれも経済的要因と人的資源の減少に基づくものである。

#### （4－3）竹林 [植生自然度6]

**[相観・立地・種組成]** マダケ・ハチク・モウソウチクの亜高木林・高木林。出現種数

は、手入れのよい竹林では少ないが、そうでない場合は、照葉樹林植物が多数生じ、枯損した竹竿が目立つ。

**[分布域]** 市内山地各所に大小の竹林が分布。九州から東北に至る各地で植栽。

**[群落の現状]** モウソウチクは江戸時代中期に中国から伝来、マダケ・ハチクは在来種とされ、食用、家庭用雑器材、土木建築資材として各地で栽培されている。

タケ材がプラスチックや金属に取って代わられた1960年代から、育林従事者の減少も加わって放置されるようになった結果、周囲の樹林地や植林地に侵入し、それらを圧迫している。これはタケ類が長い地下茎を持つことと、樹木の伸長成長をはるかに上回るタケノコ特有の節間成長によるものである。

竹林の経済価値が減少した今日では、根本的な竹林拡大阻止策はないが、当面は官民の協力で、竹切りの翁の数を増やすことと宗像市役所に備えられた木材粉碎器の活用、竹材の使途開拓が考えられる。

## (5) 二次草原

### (5-1) 路傍雑草群落 [植生自然度5]

**[相観・立地・種組成]** 道路・鉄道・堤防法面の草本群落。草刈り頻度に応じて群落高や主要出現種が変化する。群落構成種は、成長点が低い位置にある、地下茎が発達している等の特徴をもち、それらで採草圧に耐えている。

- ① チガヤ優占群落：群落草刈り頻度の高い法面の群落。群落高は約0.1～0.5m。主な出現種は多年草のチガヤ、トダシバ、スイバ、イノコヅチ、ヨモギ等、1年草のエノコログサ、メヒシバ、カモジグサ等で、セイタカアワダチソウは少ない。なお、ゴルフ場や芝地は路傍雑草群落ではないが、草刈り頻度の高い人工的草地である。
- ② ススキ・オギ優占群落：草刈り頻度が中程度の群落。群落高は約1～2m。チガヤ優占群落構成種も見られるが、より草丈の高いススキが中性立地で、オギ、カラムシが湿性立地で優占する。これらのほか、外来牧草のオニウシノケグサ、カモガヤ、シマスズメノヒエ、ウィーピングラブグラス、外来種のセイバンモロコシ、セイヨウカラシナ、セイタカアワダチソウも見られる。
- ③ セイタカアワダチソウ優占群落：草刈り頻度の小さい法面の群落。群落高は約2～3m。主要出現種は密生するセイタカアワダチソウ、これに絡まったツル植物のクズ、ヤブガラシ、カナムグラ、ヒルガオ等である。

**[分布域]** 釣川の本・支流、鉄道、国道、溜池等の法面が主な分布域である。

**[群落の現状]** 農耕用牛馬が飼育されていた頃は、土手は重要な採草場であったため、上記チガヤ優占群落やススキ・オギ優占群落が主な路傍雑草群落であった。また、現在では原則禁止の野焼きが晩秋に行われ、植物体の地上部が除去されて春の芽吹きが促進されていた。一方、大型農業機械の導入後は、セイタカアワダチソウの蔓延とも重なって、セイタカアワダチソウ優占群落が増えたが、草刈り条例施行後はこの群落が減少し、チガヤ優占群落、ススキ・オギ優占群落が主流となっている。

#### （5－2）牧草地 [植生自然度5]

[相観・立地・種組成] 人による採草・播種、家畜による採餌・踏みつけで生じる草本群落。群落高は1m前後。主要出現種は路傍雑草群落構成種、外来牧草類である。

[分布域] 大島に3箇所ある。

#### （5－3）踏み跡群落 [植生自然度4]

[相観・立地・種組成・分布域] 路肩、未舗装の路面や空き地、校庭等、人や車の踏圧の大きな所に生じる低茎草本群落。群落高は0.1m前後。

主要出現種は、成長点が低い位置にあるオオバコ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ、ツメクサ、シロツメクサ、クサイ、シバ、ギョウギシバ、チカラシバ、オヒシバ、スズメノカタビラ等で、踏圧に応じて群落高や出現種数が変わる。これら植物は人や車に付着した種子で広がるので、城山、許斐山、孔大寺山の登山道や山頂広場等にも見られる。

#### （5－4）放棄水田雑草群落 [植生自然度4]

[相観・立地・種組成] 耕起・施肥・除草等が停止された水田跡に生じる遷移初期相の草本群落。水田雑草群落構成種は1年草であるが、放棄後の経過時間とともに多年草やツル類、小低木が増えてくる。乾田跡では路傍雑草群落に、湿田跡では抽水植物群落や河辺植物群落に似た相観と種組成になる。

[群落の現状] この群落は減反政策が浸透し始めた頃は市内各所で見られたが、転作が奨励されて以降は少なくなった。城山山麓の谷地形上の棚田跡には、遷移が進行して夏緑樹林や竹林となっている例がある。

#### （5－5）放棄畠地雑草群落 [植生自然度4]

[相観・立地・種組成・群落の現状] 上記乾田跡の雑草群落に似た草本群落が生じる。他の特徴は上記放棄水田雑草群落に準じる。

### （6）耕作地等

#### （6－1）果樹園 [植生自然度3]

[相観・立地・種組成] 植栽された果樹類による低木林状態の群落。主要果樹は柑橘類、ウメ、ブドウ、イチジク、ビワ等である。耕起頻度は水田や畠ほどではないので、1年草の畠雑草、多年草の路傍雑草、ツル植物が見られる。

[群落の現状] 宗像地方では大規模な柑橘類の果樹園があったが、オレンジの自由化により作付面積が激減した。跡地は雑草群落、竹林、スギ・ヒノキ植林となったものがある。

### （6－2）水田雑草群落 [植生自然度2]

**[相観・立地・種組成]** 植栽されたイネ等の作物による草原状態の群落。水田は夏季と冬季では利用形態が異なるので、土湿や季節に応じた群落が生じる。出現種は1年草。

- ① 夏季水田雑草群落：水稻栽培期の群落。主要植物はイネのほか、コナギ、ウリカワ、スブタ、アブノメ、ミヅハコベ、チョウジタデ、タガラシ、イヌビエ、ケイヌビエ、カズノコグサ、タマガヤツリ、マツバイ、イボクサ、ウキクサ、シャジクモ等が生じる。除草剤使用頻度に応じて出現種数が変化する。
- ② 春季水田雑草群落：裏作栽培をしない休閑期の群落。主要出現種はスズメノテッポウ、セトガヤ、スズメノカタビラ、コオニタビラコ、ハハコグサ、キツネノボタン、タガラシ、タネツケバナ、ナズナ、ノミノフスマ、トキワハゼ、イチョウウキゴケ等。レンゲソウが栽培されている場合、出現種数は減少する。

**[群落の現状]** 1950年代までは、夏はイネ、冬はムギ、アブラナ、野菜等が作付けされていたので、水稻耕作期は水田雑草群落、冬は畑雑草群落となり、春季水田雑草群落はほとんど見られなかった。

一方、減反が実施されている現在では、夏はイネのほか、ダイズ等の転作作物、冬は休閑状態またはビール小麦が栽培されている。このため、水稻耕作期は夏季水田雑草群落、休閑期は春季水田雑草群落、転作作物等が栽培されている場合は畑雑草群落となっている。

### （6－3）畑雑草群落 [植生自然度2]

**[相観・立地・種組成]** 各種野菜・花卉類が栽培される畑の1年草群落。この群落も水田群落と同様、出現種に季節的变化がある。

夏・秋はアカザ、シロザ、イヌビユ、ホソアオゲイトウ、コミカンソウ、コニシキソウ、スペリヒュ、エノキグサ、ザクロソウ、カラスピシャク、ハキダメギク等、冬・春はハコベ、ミドリハコベ、オランダミミナグサ、ツメクサ、ジシバリ、ハルノノゲシ、ホトケノザ、イヌガラシ、ナズナ、スズメノカタビラ等が作物の周りに生じる。なお、ビニールハウスでは管理が行き届きやすいので雑草類は少ない。

## （7）居住地等

### （7－1）緑の多い住宅地 [植生自然度2]

生垣、菜園等の緑被を伴う住宅地を指す。里地・里山を特徴付ける景観構成要素の一つ。

### （7－2）住宅地・市街地 [植生自然度1]

ほとんど緑被を伴わない住宅地や市街地を指す。

### （7－3）裸地 [植生自然度1]

砂丘最前線や海岸の岩場のような自然裸地と、植生を伴わない造成地や運動場等を指す。

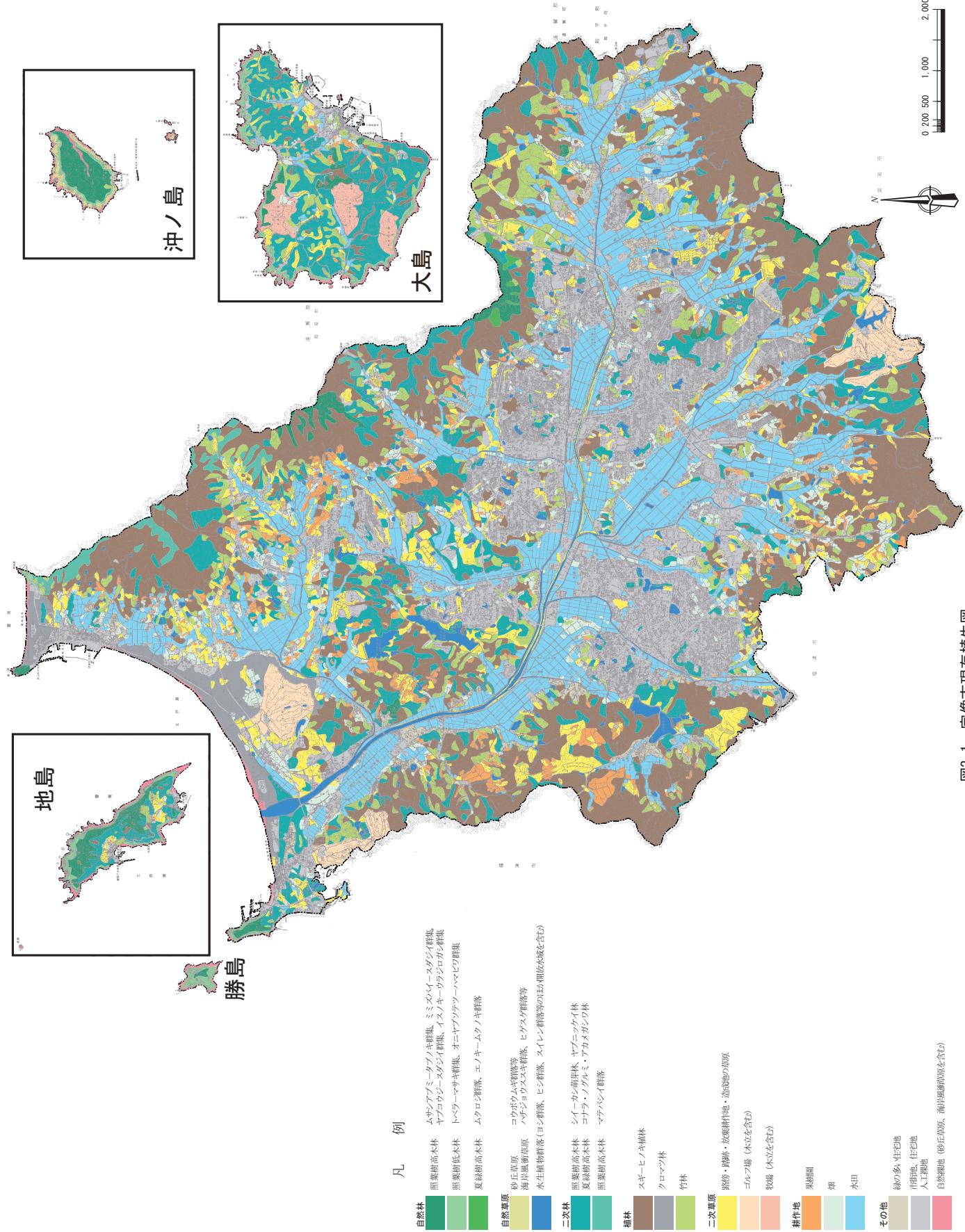


図3-1 宗像市現存植生図